八代集抄

後拾遺雜一二三四

十三

特別
イ4
3163
104(13)

貴
14
3163
104(13)

後撰和歌集巻第十五

雑哥一

仁和の
みかど
の御時
に
せり川
に
行幸
し
たり
ける
日
在原
の
行平
の
朝臣
に
かり
衣
を
たまは
せ
ける
御
歌

さ
ら
山
ち
と
せ
の
ゆき
つ
も
れ
ども
君
が
み
ゆき
に
せ
り
川
の
ま
ち
あ
ら
ま
し
も
の
を

仁和二年冬十二月廿七日

在原行平朝臣

寛平二年薨七十六

雑哥一

仁和の
みかど
の
おり
ゐ
ます
事
かぎ
り
ありて
後
に
せり
川
に
行幸
し
たり
ける
時
の
御
歌

き
み
が
よ
は
つ
き
じ
と
ぞ
お
も
ふ
あ
し
た
づ
の
あ
ら
れ
ふ
る
ま
で
こ
け
る
い
は
ほ
を

せり川に行幸したまひける時の御歌

なかつかさ
を
賜
宣
を
拾
ひ
て
よ
ま
せ
給
ひ
ける

ひ
さ
か
た
の
雨
は
ふ
る
ら
し
わ
が
や
ど
の
菊
の
下
葉
も
う
つ
ろ
ひ
に
け
り

乃古左葛野郡にあり定家てさへの山こ世の古左おもひすてと彰古今
によみ世るハ芹河淀瀬さへ年にる事勿論也こ
さの乃山みゆきニ而し八千哥お云さの山ハ行平卿姫山只天皇の五年
を山と云ハ愚案淀瀬乃天皇野行幸の御狩あし今光孝天皇の御
真乃時にを御代の古左孫ハ尤なれともありかゆきを深雪にてく
雪消の左乃跡とめ行やらくりよみ侍るなり 古今集云淀瀬之山也邦ヨミヲセ
おなし日のひそて
伊勢物語にハ翁さひ人なとかめそ
さのひそてふられ
せもひ老とも時
おきなさひ今日とも鶴
撰集抄云義さひ
きて狩されするる
よしせ七十の中納言也
翁組乃さうらく

おなし日たかゝひにてかりきぬのたもとに
つるのかたをぬひて書付たりける
おきなさひ人なとかめそかりころも
けふはかりとそたつもなくなる
行平乃朝臣 勘物云仁和二年十二月十四日芹河行幸とみえたり
致仕乃表
礼記七十而致仕とあり致仕ハワタクシヤムルとよむ

かくしとさりて
よかれてるや様
鶴を絶てると愚案
行平此時六十九歳なり
まハりやの供ならも
みふかわされハ義ざ
れ狩衣も人なとかめ
そとし鶴タヅもなくと云
み我も乃心をこめたり
ゆきてみなものハ
年きわとハ樹木の
花実なさるとふし
交則の安夜に時てし
なるく乃かすハまれ
春くの大和物語三条

きの乃もの川すこはりさあまりさち
ある時この母のく待く年ハいく
らハりをとかの成ねるとさひ待たれハ
四十ヨソチアマリ餘りうんまりねるとやられを

堀河太政大臣

ゆきてみむともハ花乃さくらすまて
よろとせおもわとしきかいする

ぬし さものり

なるく乃かすハまれとをおもう
花さらね本をおもひうへらん

なきものおもひ乃はてのうくつそ
白き月をもてゝ人
とゝんの心そ
世中をなきものおもひのつゝみ
同初云ちりひのつゝ思
緒結別結心緒
ちとりみるの心ん
愚案我も限なき恋
のほとおれ心中のか
つゝみのみつもなんとも
すみわひぬ今はもと
伊勢物語三、意をうく
ゝひろんひ今山ます
やんと思ふくとゝ云
男をとりくとゝき者

葉室朝臣

すみわひぬまつもやまさふ
ほのすゝきとゝめてん
我をもちりおいひそと
女乃いひくゝ結るみてるよ
ゝほゝ
あひきの山よおひてる三つめ乃

ゝほゝ
あひきの山よおひてる三つめ乃
そちすゝ乃そいをとちまちるゝ
一本ニ山哥次の歌の
多ゝみのとうあを

世中ハこゝろそとゝめ
すゝ
伊世乃うみのほり乃
山ゝきこゝろそこに止めり
おくいまうちきみの自に乃
家ゝりまわわくゝ結ゝを

とめてんとある
哥の心ハ同
あひきの山よおひてる
序ニ成初云我と知
ゝよいひとゝ女の心
よ者てゝよほゝ末の杉
未とも知ちまとも
そちすゝ乃そいをとう
解案初云そいゝすの
荷とゝ也愚案字彙
云荷芰蕷根之小者
ゝ
伊世乃うみのほり乃
正義云釜を夏乱ゝ

るところなく
おもひ流るゝ也
しら川乃瀧乃水をよ
瀧乃糸を家乃まへ
しらるゝ事かなはて
見まほしけれと
いよせぬものとて
みたりに人の
白河乃滝を
屏風乃糸をかきて
てよるといひて
涙を流しよせ
さんとの事なれと
蝉丸 一条逢坂の東に
延喜十六蝉丸ハ式部卿

人乃さうしよこにかく

中務

しら川乃瀧のいと見まほしけれと
みたりに人もよせぬものにや

かへし

いかにおかしいまうち

白河乃滝をみるこそうれしけれ
よる人もなきはみるへし

相坂乃関に庵室をつくりて住侍るに
行かふ人を見て

蝉丸

敦実親王の雑色也
盲目なく琵琶を
ゆかくこゝろ浪に
説此猶きりけるを
よくとあれハ盲目とはなし
髪をそり世人蝉丸と号す或ハ仙人ともいふ
これやこのゆくもかへるも
こそわかれてさかてハ
師説云 此相坂の関ハ東海よりゆく人も都へ帰る人も
もとてハ稼客乃ゆきゝのさま也 下心ハ会者定離乃理也
流轉乃心や 師生死流轉のことく 此世の有さまなれハ
ひかれて来る乃生をうけ 生れて此世に生れて
流轉とみて いつの生死をもとなく 涅槃
死 帰 処 乃 心

これやこのゆくもかへるもわかれては
しるもしらぬもあふさかのせき

くるころ　小野小町

さそふ男もなくてねさひ

あるのすむうこそ毎
作るそくるはやもく
浮ひくるるそ世を
わくる身れとと抱る
き毎り時てよるわ
女ハ二従乃礼あり
中年よるく八男とて
それかそくひくせと
ちとこきおるそ
真や浄土きと回心ス妙
の女はそもおそ
抱いんとひきし
くるちそわかひるり
我あとまるかけしし

人乃あくちくるさわれとも

よみ人しらず

世をうみわてる後うるき
河ひちわく結ふる女心もいれ
さまりり結れいこと人乃心おる
につき結ふるをおそしなくも
抱いんとほうくまわれとも
るせて結れい

注皇ちめくり
字多法皇法ちめく
らせのみ元亨釋書ニ
このみゆきちとせりて
壹萩抄備の郷よ山
寺にのり山伏ニ仿と
りもし此事幸と年
もかくもくのりり
き拠りを供奉志叶を
えんとし枫をうへてし
とくのきくれり浦浴
そも素性集の寺し
れり浦沼陸奥心れお
る中沼と叶てよりり釜
を尼ようて雲花の元

注皇ちめくり
字多法皇法ちめく
らせのみ元亨釋書ニ
このみゆきちとせりて
壹萩抄備の郷よ山
寺にのり山伏ニ仿と
りもし此事幸と年
もかくもくのりり
き拠りを供奉志叶を
えんとし枫をうへてし
とくのきくれり浦浴
そも素性集の寺し
れり浦沼陸奥心れお
る中沼と叶てよりり釜
を尼ようて雲花の元

素性法師 集二あ世ん イスまうり

このみゆきちとせりて

サイ井 平子源滅皇女源和后 西院乃きさきおりん

おろさせ

おくおこおいせまいる時の院

乃中沼れれをけつくきり付

結る

とくのきくれり浦浴

そも素性集の寺し

れり浦沼陸奥心れお

る中沼と叶てよりり釜

を尼ようて雲花の元

むへもこそあるなのすくり

乃ありけるすとなん
心しらひかやう小法師ばら
女院乃みうきの垣下
花多餘情云女院の
毎年乃沈禮祈心
月午乃日そを俊也
垣下（エカ）
女院乃宴（キヤウ）乃垣
下にて 牡丹花 春花秋月（ニ）人救乃あれ人の交（マジ）
我のみやはそもろ〳〵ぬ 殿上乃人々
て我う袖ぬ〳〵せ〳〵ぬ
〳〵みあつく 蓼（クヘ）蓼（ミ）味
雛（ア）ん或おそ〳〵ことに
垣乃うき年のうき世 ミうしといへるもあ〳〵てもうき世中な

堅十六 六

こいのみをうくいひかく
うき世の中よ入いそ
蓼未あ〳〵んとも垣
ていふみあきすす
と蓼も辛きにこそ渋
ひくまこひり 象
おこひくれいの
すみうき乃きぬと
垣古乃岩とそ
うて裏はうくもそ
じとはいそで打まよ
らの心を波乃うちかく
るようよいひけて
うへいるくもを開
をうて

いうてあ〳〵ひくまこひりはかりくるまうん
あんをきうれいきとやいふくと
ひくれい 菅原元輔 天禄三年奉淺
右大臣敦忠子
おこひ川波
すみうき乃きぬと
あをうちかけようくまく
法皇（宇多帝 昌泰二年十月高日於仁和寺御室世二
てみあいるきさまをもめ
まうくいるくもを開
さうて

（注釈）
今とかいつまでもわるむし
（左し）
乃ことかなるへしわろくんくろろ
（温子昭宣公三女寛平九年為皇后）
しるろうついては　七条のきさき　皇后
こと乃葉よりしもせぬ
むしのおほかる世をいひ出
おほかりくる世をいひ出
やまとの人の
る　昔乃世をいひ出
ふるよりてもいひ出
てもいひ出ぬ
ことの葉
海とのみ
上古の頃より
いひ出ぬ
伊勢
ことの葉乃
人の
大伴黒主　大伴皇子
乃曽孫　都堵牟麿
の子し　長明世の物云
志賀乃郡よりわ
すくくしき
黒主乃明神
神いますこと
あかせんりてのこるめ
一条猪隈西葉よ海濱
こと出てくとわ
玉藻を玉裳よろ
てこ神はもとろく
乃山て海濱のこるめ

大伴乃
かろ
ふるよ
志賀乃郡よりわ
すくくしき
黒主乃明神
神いますこと
あかせんりてのこるめ
一条猪隈西葉よ海濱
こと出てくとわ
玉藻を玉裳よろ
てこ神はもとろく
乃山て海濱のこるめ
（常し）
おもかけ
月乃
みほね

らんことひ給きく
帝へ侍くなりと
ほりとおもひ寄ます
もしは葉の玉よ仰も
あかれぬさまみくも
雖波ほいはもの秋
ふ屋重八ほきの秋
詠しほうものおもう
れも添き志をひとする
もこゝをつくよ楊を
うつくよめり

浮ねまうのこゝろも
常明親王　二品刑部卿
本名將明　延喜第四

大江玉淵朝臣のむすめ
大和物語に三ほ宮の御息所と
三条式部卿陽成院第三
元長乃みこ住給る時てまさりう
ます
多氣栄方朝臣の第にて
おひさくゆひくみこんすり
おりうつまをきく
何久んとてこの御みまさ〳〵ときて
出給るのちはねあきく乃
中務
みこよりかくされて月日久さく
住くあるに家よりて計第を

あひくまほのかに
浦路ゆく日本紀五葉
童蒙抄第四番の江
乃浦詠ふ蓬萊の神女
よ並くて老不老くく
き抱ゐ松て詠りく神
女形見の箱を明くみ
しわ俄よ老くう世
るしふをりとこゝにの
第をもあけてはせんと
月日てくそ家りゆ
てとりあ出よ心を分
寿をつくほうろふせね
彼判司法官とけう
ゆうけせんくめの屏風の

元長乃みこりをとゝ

中務　宮詣の行更

あけてくふあるうへせんこれ乃江の
うくきよ
受領の妻子を宝を沽物てうるにかりよ事
忠房朝臣ほ乃みまくく新司てる加くの
閤を新司と
法皇御崩後を
屏風てうくの玉乃名行る
すくあり物せくさひ江とゆとゝろよ
かけ里とる

寿をつくほうろふせね
彼判司法官とけう
ゆうけせんくめの屏風の

寺心ざしもうでてすむを八重菱抄云ころうよ（ヤヘビシ）垂賞とりふ（タレ）この会浦（カウラ）乃太寺（タイジ）云ふき
玉ふことわ珠をとりて来（キ）よかてゝより志ろくもをとりしむはみくみづうるむ
ま一飢死（ウエ）ぬる者ゝをみてわ垂賞（タレ）ゆきのごと〳〵一年乃間ふるまふ
まわりて愚案（グアン）蓼来よ垂賞還珠（クワンシユ）とあるも寺の心い忠房乃玉司のそと年
をへく吏務（リム）おこたりなけれいよひよひ乃ぼりも行んとし法（ホフ）を添て法（ホフ）

兼輔朝臣宰相中将
延長二年正中納言
超上簡五人八年兼
右衛門督（ウエモンノカミ）
賭弓（ノリユミ）還立（カヘタチ）会（エ）
年中行事
年毎（ごと）云賭弓（ノリユミ）云
年八天皇弓場殿（ユバドノ）
にて弓を射（イ）給ふ
也中ごろよりうるす

兼輔朝臣宰相中将
みるさと乃
こゝろもし
こゝろ乃う
ぬる乃

八礼記云ふ（フ）そいたる右近衛大将射（イ）礼（レイ）云ふ（フ）左右大将射（イ）礼（レイ）云ふ（フ）大将
てわ大将射（イ）るに答（コタ）をうぶ（ウ）それをうけ（ウ）
ずるさとの心ろ　大将中将を分（ワ）さ
て今年納（ナフ）られいるさとの心ろ
さ〻き人乃名（ナ）をよとりあ（ア）げ（ゲ）
かうさとして皆
のうたゝねもの
あうちのうちことひと
淡路掾（アハヂノジヨウ）栗田（クリタ）業（ナリ）弁（ベン）雲（クモ）
ことひとふ（フ）もし四年
の但（タヂ）馬（マ）守（ノカミ）上（ジヤウ）
ひさう〳〵一人いむ〳〵
一位四ヶ年のうち人
もをおもはと

あうちのうちことひと
そのうちのこゝろ
すけの弁（ベン）あ（ア）
ひさう〳〵一人いむ〳〵こうをよられ
私乃こゝろ

むつの宰乃事

人乃むすめよ添乃ねきの寸み
侍るを女乃母や侍くいふう
せいしやう侍れを母ひるかなて
うるひるなりて女ま寸
てかきりし
小山田乃ものもろ
ひるまいつきれいうひきりまけ
くみりうひひりる

小山田乃ものもろこさりを
いとひるりまけーきみる
三条大臣乃女ま寸を
定方公承平二年八月四日薨
おくる寺

女乃もと

大臣めーありと但大臣
承平三年二月十三日
仲平任右大臣左大将如元
秋宮乃女
寛平皇女母高旨氏女
いそのかみまもりもせぬ
仲平公兄弟各三公よ
のかり栄ふよ定方公
いうせひるとすれい女
房うやみくのかみ
いとこの秋実ーまりせ
るひーるーー愛
右兵衛定の妹し
まこるよりもそのこ
小野宮の右大臣ハ仲平

乃妻大臣めーおるときて秋実乃
みこよきー
大和物語いそのかみ
いそのかみ乃ふるやとりうつくるへく
あまてるやとりうつくるへく
大和物語庭のかみとうのまん
小野宮実頼公忠平公号
かの栄華乃おくいまうちきみり
あひるりうちきてほうりる
大和物語
花さうわまハこふ
まこととりゆきくのこんまきり
せこといふねいおひねるのきく
モロモロ天暦五年二月任権中納言二叙従三位二
康明親王中納言ニよりうちる時ハ

乃男もれハ年ゆ
せすと以下を読むも
なりひまやまきみの衣を
動物云叙二伝一時着二大臣一
袍流例也僻案物云ここき
ひろさきといふ三位の袍
とふし袍ハ一位ならん三
位まて同色四位深緑五
位緋六位緑雑叙
三位之時着二大臣袍一也
廐明々条後正四位下左大弁より
叙もる時九条右大臣袍をはりて
出来ついのち辞進をよろこひ
ふみて勢りて僻案物云雑袍
世の整もそれる恢ひよ袍

こゝろおもふのあら
こひもちきりてくちうちもふき
ちぬきあまれもころも

師輔公

天乃羽衣と読ゆ
ゐまや天人の羽衣乃事
ふるさとのふるの詞
ふるさとのふるの詞
ふるさとのふるの詞

大納言

雅正

おやないおちきと同
おりれて乃世をいきのす
ものれその世をいき乃末乃
うき おつなきしねる
泡を消わるこ同心も
乃泡とこひきく時
まおらわ男とも
くるとよわるもの
六伝美人四季生の
姫必巡舞して伝
まものおつるへかりも
あつるとも六伝も美人
い墓殿るを又伝よ
て美人をもれ殿
上をかるます

十人の
れい大江の里

おれくく乃世をいきのす
おそくきしねる
茨原乃さねきるくとわう
みわるもうてあす殿上おとんと
ふけるまる酒うくるはおてよ

兼輔朝臣

うるも乃こよひわうあけそも
なけあるもきみをようこそ
清少納言乃みやと不おまりあて
ある枯りの上の枯
こ人おまもて乃ん
と伊勢う男れるこ
ひとものみおりめく寺を

七条后 漫学

うくるも乃くよひわう
納衣之伝祖これ殿天
ものねようにんとも
人わすることふきを
長柄橋い古ぬる事よ人
里橋公家と画あ我
いさやの法もきにの
の徒よ古ぬんとも
みるる男いるの中ふ
みるる男い古ぬる男
きくる男い涙の中う
ある枯りの上の枯
こ人おまもて乃ん
と伊勢う男れるこ
ひとものみおりめく寺を

人わすることふきを
おうう乃枯と男乃ぬん

清少納言

いせ

みるる男いるの中ふ
まうう乃もうおやもうん

承極乃みやと不おまりあて
成うけんとくく仁和寺おりわく
結れれい

敦実公之孫 寛平法皇
おつみ乃こと 天暦四年出家

敦賀郡を二郡となす
廿一年仁和寺宮と号す
廿七年仁和寺宮を右京区
御室に遷し宮を右京区
仁和寺をよみ奉る
出家のち乃法名を
寛朝と称す 名八
寛朝法親王 俗称
肥後入道宮 御室
名八これ始まる
寛平法皇
我も寛平と
申とおもふ
寛平法皇
常盤の私も
へ一中も

野大弐好古もとき　たまくしけふたとせあはぬきみか身を
はまれ時うての使ま　あけなからやはあらんとおもひし
さきまかりてか侍るて
くわうのみこえもし　かへし
たまくしけハふたとせはぬ　　小野好古朝臣
たまくしけハふさとをと　あけなからとしふることはたまくしけ
いひあけなからとい
えんさめのとなり童　身のいたつらになれはなりけり
蒙抄云あけなからやハとハ五位乃緋衫へとさまりやハと云る也　愚案く
五位のさまかひまひく二年あへぬ君か一下ハ四位になるへきましく赤衣
あるうりてやうやうきんと思ひしこと
あけなからとやすすむハ玉くしけハ身をいらんとてしかしみ五位乃緋衫ありう
年をふることハゆへにかれハ何る追捕使ありさきまかりてあまうり寄しこく
いちかうる身とあるゆへに都より何ハ四位になさん料なとし　純友天慶
四年ありかうひく一年乃五月二日好古従四位下りなかりに五十六歳

後撰和歌集巻第十六

雜哥二

やりぬ心あるへく前太政大臣によせて　忠仁公　なやるへと云
侍りける　在原業平朝臣

たのまれぬうき世乃中をなけきつゝ
日かけにおふる身をいかにせん

やましなのおほきみ乃世きさきよこ　拾芥云添勤在志賀郡に
ときわて侍るまゝに人乃ためなり　閑院乃　源宗于女
大大士佛二臂如意輪
これかりあつてたるをこそいはまん
ゆきるとぬるまゝ人乃たけ侍りけれと

前太政大臣　良房公也
太政大臣久しく然て
文徳乃御時良房公
任し其續く基經公
みな任しこれハ良房を
おこひ基經へと指と云也
たのまれぬうき世の中と
おかやけり何こまか
ゆくさこころすまし
それのまむかしれを
日かけにおふる身とよめ
るなり　也業平ハ忠仁公
の家来にされハ此歌を

とよりあへこたてる心
ゐるも新井ふみんと
わくのけしきをうらしや
我のかとうしくて肥
ころやといひて先を
みてよみける草葉
かゝる露の命と年
へ草を命く命を
のせる物なるも
かくてのみやむべき物か
心明し
みそしきりくるのように
俳叢抄云小野に御輿
迎とは園あり延喜
七年閏十月十七日行幸

わくのけしこそをうしとやきしふらん
大和物語二六草ここわたる
草葉かゝりかゝる露のいのちを
延喜御時（十月中酉日之寛平の院時ありける）賀茂臨時祭の日御前にて
さらつきゆて　三条右大臣
かくてのみやむべきものかちはやふる
賀茂のやしろのよろづ代をみん
おなじ御時小野の行幸にみこしに
まうく　枇杷左大臣（仲平公）
みそしきりくるのよこにとしへつく
ふみ乃みゆきをまちくらんつん

小野二千時（年）枇杷左大臣中納言春宮大夫左衛門督　こゝに小野大原神社
ある故神社行幸とよみいひかりて若い露行済読んせんとの野行幸
ゆるし延喜乃清時小野にも大原にも行幸ありて　西家抄云是八幡行幸
露行済読人のさめ之神社いのちれるよく悪業そし今の小野の西南
りけるて神社法
乃我住居ともの名
比品にて小銭せよと
てよの行幸と行付
つんとの沙ある也
戒仙　戒仙ありしこと本
梅澤よかにせうさあり
いつ是をか見もわりん
山かには清師乃ゆらし
雨中の梅花さの月
とよめるあるへし

戒仙かみつき山あまこそり侍る
よこと清師まうてきこくあり
みかこゆまゝく侍るまま
よみ人しらす
いつ迄をか見るもわりん山かつ乃
おつるなみもかかりつ事
これかあかひく悲むすり物りつ

なかりハきゆるよのまゝ
常ひと日ろうちく今
かゝるとりてかの網を
霜といひけくよせ
なかりくきゆるよの
ことわりしれおそてはな
おきて論りしうきし
日もり霜乃きゆる心と
いひけらく霜をも霜
乃強さし
めつしやむりなの
長良乃山井をいひけ
てらへハかつらそ
かゝらねよ我私ハき

しはしはとめくそへり侍る
おきくせ
なかりハきゆるよのうと志わそのゝ
けさしもおきくなかきつゝん
わかり侍る時をしつきりはねまう
てくるそとしゆくハまいり侍り
さりくるふまいり侍く
よみ人志らす
めつしやむりなの乃山の井さへ
志川めるうけらくちとくなる

楽しる心久しくて
なるなりらはされハ妹
しやとよるらしや
宇治乃網代ハ主なし人
網代なるとくわり
水魚乃使としても
さやの心て居る
人なりや　西家 網代の主
うち川乃波よ年をれ
三位 あ判とえ別とよう
へとく網代ハ水魚乃
よる地されハ我しえ
判しまよ京よんと
かきいつるねところ
ねところハ根源乃

宇治乃わたり志れたる人乃ゆわ
されハかまのわて大江真後　中務小司
うち川乃波よなれし君か世そ
わきしおろりよわねつきりる
朱雀院なりや
院乃みと閑よおかおしとき
かきこ侍りしわたり世話りる時
人こそ扉てうせきを経る
これかるとて小式乃めの
かきいつるねところかゆかわ
そ川秋乃世いいさてなつさし
ゑし
大輔

おいらくるてゝ云
ゆく訪羽も雅ろえん
生うのれいろえ
生といひくといふ由
服をこゝてそ
わとれえんとやゝ母の
我を兵んとそうよ
ねふすもいく去
くてこゝとゝ
かれねくわうきゝ
我うきゝ面をえ
ひけゝりひくえみく
きさねとえれてそ
とひきえゝりきと
ひとゝろいさや去波、

いそ
三れそ
こゝのと
男ひ
かれて女をそゝわられいきる
そひる男そこゝわるうゝ
世中をこうゝひわつひるれと
よ女ゝちる人社ゝいえす
につきねこゝひねれそ
ゝろいさや去波ゝ汁そ

人乃守れ起ゝくゝ禁
心のゝひるゝれる
ねるれいこ方ゝの
ゝよ分えんよ分てゝ
れゝねて起ゝくゝひ
さゝこめゝきゝ感ゝ
ゝをきゝゝねよゝれる
直きゝゝも曲る枝ゝ
ゝゝゝ人とてゝゝ
くせるきゝねゝきゝ
と去ゝて寂を求てゝ
事れわゝきゝとゝ
漢書云吹毛求疵ヲ
うれろそねこゝろ乃
解要紗云吐言非、
心ゆふゝる人きゝや

よゝんあさゝろうかねてゝきゝ
いゝゝくゝことゝみむゝをとき礼人乃
みとき
ゝ津内教(タカツ)を摸武皇女
かをきゝゝよゝきゝ本ゝゝれる枝も
けをゝきゝさすをいゝわれきゝ
帝ゝ生ゝ佛ゝ生ゝ活ゝる 淡海居 檀林皇后 垂手
うれろそねこゝろ乃みゝくゝれい
こゝ社(オヽ)ゝるゝゝゝ
これ生女のゝゝゝゝれて拘ひ
あゝくゝる女乃あるさむ乃風
やゝとゝれい よ人ゝす

せるもぬるをまち
ひろえてさすあるそる
ろくしさまよりも山
所の後ろ大和物語
ままちかよひくる女乃心とけそ
いその狭の浮ことを
小町乃歌のことく
先考宣女配陽成院
こと紹運録にあり
あかねさす昼は人めも
序哥しげきの若乃
せよひるうる心を憚
てこいそんとそこうる
乃うらめきゆる
我心とけぬそと
わすれそそうち
暑毒のとうる山の
とうる
むらおうち
大和物語よい平中無
女乃男うりはさく
もちるるをきうみく心あり
るる人をいひはうりる
ちこ地乃人めもれる山をよ
をちいへ
かへし

推ばかりなるいはと
ろくるやまれきねそもみちす
あらしせ拾遺
あらしきこうはすも
けくなるいはすも
男ろうしこうそひ
つまと推いれ男世れ
男をもしんとい
をとうことい憚うと
暑毒のとうる
とうるいこと
て神中おうそ
をちこち乃人めもれ
心明大和物語
兼國のきりくるとを
多をうしこと人きれぬ

零落乃男を人よ
えんとうこて今れ
ぬ世界とおもてく
おきゝよすもの
人きれぬ世をな
住山ちねつ
そすむ
うり大勢
山迄
あさうけよ世乃
あのめさ
ありて待る人
きゝとをくゝ通せさりをこゝよおつすもと
てよ久〳〵うきこてさわはるとこ
まりそくいれ
土左
あさうけよ世乃うきをみて
あのめさまより年八へよろ
山さとよねるるむ〳〵あの
る人乃いわこよいすむ
みうき世を思ひて詠

るかよをつく
ろ〳〵通せさり
とをる
春やう秋やゆきく
いよりこゝ住
泊てゝ
如くてる男
秋乃ゆきゝ
れいよりはるも
世乃中いうきものそ
とよの
世乃中いうきものれや
こゝろをやすめるよ
も人言のやく
きる世いうきものと
むさし野ハ神ひ川

とひくれハ 閑院えんのことゝ

春やう秋やゆきく
かけ乃ろ末と世をすこと
翌こと

春乃世乃中いうきものれや人こと
こゝろをやすめるよきてそ
よ人こと

むさし野ハ神ひ川
わりひとと
きる世いうきものと
いとゝふくこゝろあて待る

武蔵野の春よ神の
めぐみもふかし人
乃ゆたかの御さよさ
あくまでもえのねの
ながきとよろこぶや

大まつきみのもの
ある春よ千やほよろづ
ながき名ぞもろともわれ
うよいろうんぐちのそうけ
ていうそうそうぐれい

よし人生ても

比人乃とつを祈それい

壬生忠岑

さて兵法をあらそひ
このこはのそよかぜ
みやこるい人をぞな
こうはおやもの心

日乃いはめるやこ漆て
かくねるやとふもり
みくも世乃主てのち
風乃主て乃歴そう
立やとてめさる
きりあの高もと
きりすもと俤歌
くもり

かくる
さい主てと 伊勢

みくもちやすきわうきあくる
春日りまうてくるさの
乃引もわうを川世もわゆる女車
の逢くねるよ簾乃あきくる
よわを川るよ入れをいあひ主
ひくねるる女乃心さ
かくるくねるそあひ

武蔵野の春よ神の
めぐみもふかき
乃ゆたかの御さよさ
あふぐもかしこ
るやうやう

比人乃とうを仰それい

壬生忠岑

大ヲ
かすみこめたる春の夜やあけぬ
らん
白雪のふりしく時はよしの山
人乃るきも
なし
ある所よみ侍ける
古今大歌所乃寮
卜部をのれい
すきものする人もと
いふをよめる
伊勢
卜兼(ママ)
うらなひてふせやすらんかたもなき
ているをうらみてよめる
よし人志
よしの川きりのたえまにみわたせば
なみにおれてや
雪乃ふるらん

さて兵法をあら
このことはのうまかる
みやうるい人をぞな
こうへおやもの心
只乃はなかるやこ漆て
かくねるやとよみ
みくら世乃主てのち
風乃主て乃歴う
立やとりめさる
きり春の高もと
きりすもと俤歌
くらり

かくる
しさい主てと 伊勢
みくら世乃主て乃ちわれもかくて
もちやすきわうきみる
春日りまうてくるみちさおの
乃りもわりを河世わゆる女車
の通くる侍るを簾乃あきる
よわを河りよ見れをいあひ志
男くる侍る女乃心さしよくひ
かくるりくるる侍てあひ

みるさまのさまざまのほめ
侍保ほい事良られい
古今乃と読てとと竜
和さる中の人られ
てゐる　閑院左大臣を尋て
よみる　ちり出　菊亭の嵯峨
り史ち
わりやとをいつ。
楯乃家いつ。

わりやとをいつ。

そうわられいさこ
枇杷左大臣よう侍る
をもとめ侍られいちぬあひ
出わて侍る家よとわよほら

枇杷左大臣

六七年ぞ（六世十七年）
（竹）に
る女よ侍られいの車よいられ
て侍る
（おわやとより二以下ハきたのちの一つの）

いさん枇杷左大臣を尋
つ五ちの　ものいそ郎
り初よをと女のそと
ちわる菊つ乃ちおを
（勝ヤとを）

ある乃と此ちの非
八宮初云とちの非柏
事よあると聞をも
神ほ初云樹神也万の末
とちる神心い消し
後ちりをとよる菊初
日と吐く後ちる

おりていこちやうん
式笛をふとを吹り
いこちやうん出し

ある
（おわやとより）
ある
（イかへし）
か
ある乃と此ちの非
枇杷左大臣
ちとする
ある
ちとする
なちりをとまちわくさうき
初ちこたひよあわられいちけくま
わよるるととめちつひてて
侍る笛をとりとて文のあさ
よほの子とてよさんさうす
（きやうんの）
（ハわとやうま）
（ハこちやうん）
笛行乃

ほくみやうひとりの
ことをうたひまひ
こゝろ恨と
もうしんこの
一ふしあり
あこ十ゐも恨
う笛の音乃
我名を
つもれ心
ことも笛の吹人の
ろうつる物
文選馬融長笛賦云通
感物写神
誠効志ニ一ト行の
ほくみやうひとりの
ことをうたひまひ
こゝろ恨と
もうしんこの
一ふしあり
あこ十ゐも恨
う笛の音乃
我名を
つもれ心
ことも笛の吹人の
ろうつる物
文選馬融長笛賦云通
感物写神
誠効志ニ一ト行の

人まほ
我名を人に書る
ろも是下ろ
ろ彼物もする
する人もろと
る事乃多
兼忠朝臣
貞元親王
むすひきり
ふのう
あるやうきせめて
まほれにこう
を五ふまとも

人まほ
我名を人に書る
ろも是下ろ
ろ彼物もする
する人もろと
る事乃多
兼忠朝臣
貞元親王
むすひきり
ふのう
あるやうきせめて
まほれにこう
を五ふまとも

兼忠朝臣の母
むすひをまつ
あるうきの

かれよの心を紛を
むすひて葉を決を
つるまゝて德
うれきもうきも穴
やらとまさ人乃さえ
世をいく嬉きも
潤に知れ物思ひあり
きりまも落涙をる心
とりくよめり百法唯
一心これ空別法の理
切りそかまき物ハ
世の心よりるハぬ男ハす
つまそもかりする
りうさすりな世をう
むくへきりすち与ね

物思ひ侍る比やんことなきさう
きふよりとも世をいかんれハ
　　よみ人しらす
うれしきもうきもこゝろハひとつにて
わかれぬものハなみたなりけり
世中乃心よりるハぬ事やなるは
　　ねくらり　　君か
切りてかなしき物ハ男なりけり
うきよそむかんなと思ひけるに
おもふこと侍るころ人々よみける

ハまうき男ことに
おもひ出るこまうき世
うつゆく雲乃ハえて
を告てねハさいえんで
やかて果知ねもと思ひ
出れハや世をのかれと
あハれとも（うとも）
鵤哈のハあるかなき
りよ消ぬるといえん
とてし哀とてもうき世
とも一向よいそら
るまき世をされハとの心
哀てふことをかくさむ
此つきまし新といふう
よ厭む世をまとり哀

　　よみ人しらす
おもひ出るときぞうきさ世中を
うつゆく雲乃きえてをきねハ
　さいきて
あはれともうしともいはゝかけろふ乃
有るかなきかにけぬるよなれハ
哀てふことをあまたにさむ世中を
まよのかなとゝひとすらん
　　高浮
あわれかれにふことは雪よ
蓮白き家とわく侍る京

とひ尋る人もなく
て然このまゝ我も
なるあらんかゝや
猶おもふとゆきても
母乃喪の猶ゆるて
けるも見ねハさう甚
まてらんとの
ゆめまてにられとも
身の逆様なるを
ひとりまさ夢まなる
猶ひとも見へもちし
ともの歌の作まに
猶ゆまうん猶なせし

母の喪
まく母のおもひにまさく久しうかゝら
てかのさう町さは侍る人なをひつ
かうしける

猶おもひとゆきても見ねハまきの
あかみにまやいくちや夫ねらん

延喜御時ときさ乃死人のそとよ
きうしもせなとおりくてはり
きしける　千はる

ゆめまさにらまつしも見へうつゝて
わひしきよりハあさやまわらん

いその上といふ寺ハ
石上寺大和之拾奴云驛上
寺号ニ宝蓮寺ト云
大和物語にハ小野小町と
いふ人むつきに清水のまう
てておこなひなとしける
とてきくにあやし
うたふとき法師の声
まそこにやしよふよ
むさしお將大徳のやう
らんと思ひておとろき
てさ書ける
いその上ま様ねを
石上るかれいこの人

後撰和歌集巻第十七

雑哥三

いそ乃かみといふてらにまうてて日乃
くれにけれハよあけてまかりかへ
らんとてとゝまりて此寺に遍昭
侍りと人乃つけ侍りけれハ物いひ心みん
とて云侍りける　小町

いその上に旅ねをすれハいとさむし
こけのころもをわれにかさなん

かへし

遍昭　俗名良岑宗貞　号ニ良少將ト

遍昭集の中の
世をそむきてこひしき人の
のもとにやりける
かきつめて昔の衣
素門の服と名付
せしものを（こころみる）
（寓也）
世をうしとてこひの衣
只一重きるとぞ
ぬれ染の衣
しいさ法師よ
わんとし戯れ
大和物語に出て
こひけつやうに
あふことの
未実のすくなき
を年切にたとへ
うくるの物うきを

清和院君

せうみのきて（けイ）
ぬるもひきよ
あさ
ぬのかせぬるそ
女乃ともとわけるゆゑ
ひく結れい

古大后

よわりの垂てのの中
る歌さよ物うきね
うき恋つゝとも
あさ人も
心消し

みや人とのゝきを
文仕へとやる女乃
帯むの書乃よ
乃てよめるし
我ら人とよりき
を女帯むも同心
立ちるゝのや
わ乃ありね我
君乃は動きとう
ありて乃とも

あさ人も
わり乃
さ

みや人とのゝきを
のへ（かゝ下げの匹乃文とする）
ひこまるの待く里よの
を西ひくさうまのわりる
おかいまうちきみ乃あるを
（禁帯の局）
（大大后師輔ちゝ）
大輔

ぬれを恨れ
わり乃
あるも
ね我乃
ありて乃とも

山みやうみ人をおとろか
誰をまくしてか
て陸みち
小大浦みとこひ行んや
もろこし
ろ吉ふねもろこよ　やまちとれら山みちよ
ゆくさきハ吉れてあるとくやま
吉ふか乃宮ゟきこゆる宮ゟきこゆ
ねる山辺を
形の松もとに寝ハ
いつものふねよ
人乃ゆくものふね
ねもふくちまり
ふくほうさ
とさしねをと

いひちまきかふ
てとかきて　よみ人しらず
乃ふろハねよのよにせて
のちうきこてきこゆるもきこてとう

おりけをつのひふ
ふれぬ人をそ
発ゆく彼岸ハ
しゐもと伊勢
乃ふのおりもの
ゐそふ時心を
押沈めくせこそ
陳よ
すの乃ゆうき帯や

いふきとめぬ
地乃松ハぬきとめて
吉ふる山さきもと
発ゆて舩を
ゐみ乃すよあねか
並松もと人もふの

さいき吉ふもと　伊勢
おりけをつのひふ
ふふのみこそ吉川めるまけれ
から乃ふろ乃吉ふる女を乃そく
ぬきとめねみ乃すちふてあやきも
へふふくふのかとを吉ふる郡
彩吉ふもと　よみ人を
ちみすりふねふれて往ふの
きふみもよふすありやそてふん
はきもせをきことのそれおふるを

ことゝしひとり事なり
あかずすればとさき
さ数し二年ばかり
そ見ぬまゝやと
の女乃心みえはてなく
かくひやもの哉
みかりけるかれば六
女乃爲に縁る私と
うつく二年斗の後
結ひさかく男こ
すへ我もかく心りん
らそはとの心を下染
斗も忍まりとし
おもひ出乃ならぬや
なき人の伝りたし

とりくてのちかことゝらひよ
ことへ入りうらてさしいまと
さしとなかれはよみ人志らず
みかりありよつれとすきはりそらは
志ちを爲んかをも忍やせさん
勤子内親王延喜皇女配九条右大臣天慶元年五月薨
故女四乃みこのほとりのわさせんとて
菩提子珠数を
わかへ乃ずそくらん右大臣のもとへ 師輔公也
待もちて此ずそくるとて
くゝ結ぶる 寛延法師
おもひ出乃なみだやまさん爲き人乃

この哥を見ん人はまさ哥なり
おもひ出の涙乃ひの煙や
まさりんとし菩提子を
生ひ弘るなれることを
なかれるこのゝ為て
菩提も梵語そ道と
飜譯せられは成
此乃菓といふ心や
ばかりやを思出我
の心さしのゑへと恨ま
付くるとうくとし
此の方乃結べよとり
まれはぬ心の爲や
いつとなく身とふなれね
我が家のつきうら穴

かけりあれる心の哥見ん人はまさ哥
如し 右大臣
なかれるこの子をかなく心さし
あるとえるなりねと人はりなる
さらめかるめも待ちすひよかよ
との子すと女とも思ろ乃ことかさ穴
ぬれて結ぶれはよみ人しらず
いつとも身とくなられねかけあれと
ふとかくことりひとりやとぬる 榛柵
前栽乃あつりするの木のわひ

そこみくも　来ことに
　　秋と二人　待ちとも
風雲の　うつろも心と
　　あゆろいこさきにまる
　　まいこ我守も　まろう
　　かりねに我も　仰と
　　ふう一まと心ひて
　　やはみまよ　翌風雲を
　　雅紀と　詞頭の　詞
　　山かつみなりた
　　山ほさ　不あるも
　　主と仰ぐる　樹の世
　　又し　出ろうとわ
　　やそうろう

志延法師

風雲の　うつろもかとねと
　　あろうまみてるう　未ちろ
　　かへ一　寛平皇子女蔵伊勢　行明のこと　為忠家後
　　山かつみたまでるう　未を八
　　又ねいろとうまへちる
大井ふる　ふ雲人へ　酒へろへ

大井にうつる　舟乃
　　浮るう　棹句ふと
てうとも　うわの　篇
　　大井に　のうつる　舟乃　うとやり
　　宮　照ふれくやう
　　山も名のこそ
　　なもろうもと　よみ人
あすか川　紅葉ひとの
　　紅葉ふ　乃川流乃
　　うおにな　多のは
　　流よろこの　世を振ん
　　ますとし　往人
乃我　多一つのき
　　うふと　流る　同
世乃中と　ともひて
　　世といとひつう　妻
　　けふ　ほのてよ　ちりひろ乃　色
　　大井に　のうつる　舟乃　うとやり
　　とうとも　うとやり
　　よみ人
あすか川　紅葉ひとの　乃ふも世ふ
　　まてふ　乃世をうみつる
　　こふ　事ふる比　ふまて
　　世乃中を　ひてふこと
　　うきふ多　ふ乃山ふる
　　ちふねる　人乃むすめよ　志の

落髪の頭(こうべ)を剃(そり)て佛(ほとけ)の道(みち)に入(いり)無常(むじやう)眞實(しんじつ)の理(ことわり)を思(おも)ひすてゝ後世(ごせ)をすくふ事(こと)あるよしを聞(きゝ)てそれ〴〵に悲(かなし)みの涙(なみだ)をもよほし

菊屋(きくや)宮崎(みやざき)元吾(もとご)

なきかずに入(いり)てはきえし乃(の)ち仏(ほとけ)にも松(まつ)を

みつゝ

大智院(だいちいん)天礼大明神(てんれいだいみやうじん)

いのちおしまるゝ物(もの)ならばそのかみをこれ

ほどみるよりもなみだ

すゐ月(げつ)

かすみ

ことのそもそもをきゝてとぶらひ

いとなんするやうも

ふみもたゞしからず

よみもたゞしからず

書(かき)ぶりもたゞしからず

ゆゑありてすみもそめおるよ

うにて

ふかひ乃(の)名(な)

宮崎(みやざき)

ゆき

あふことはかりそめながらこの乃(の)別(わかれ)

これやこのよをうみわたるみち

時(とき)

ぱちぱちと

別乃(わかれの)うた

ものもいはず

あふことはかりそめながらこの乃(の)別(わかれ)

これやこのよをうみわたるみち

時(とき)

ぱちぱちと

玉江撰出之若の浦にて海
いさりふねの枕詞は何
あさ教へよ男ぶれは
誰をされとさしおきて
我はこそせんやつもあし
とぞへし
みちのく乃知もち乃
尾駿 尾のおぶり隆
但八屋好三陸奥牧の
名をこのふは野飼なり
除をうでし日づめの駒
も野飼殺ではあつかね
これら饿も岩除く捨
あつまさかりとも
壺胡録（ツボヤナグヒ） 纓老（ヨヒカケ）

これをこれとのわまともこゆめん
男乃きぬいうまこもさそ男のうえん（男の消し）
女のくまきもとけねをとしあやきて
おかれも無きやまするうさ云侍れば
みちのく乃おちもち乃詠をものみすめ
あまとこうゆかかれまつくこまのうは
善胡臣も寛平五年左少将 右近衛督舒息
お将あらく陶よきみてひうるとき
何ひ出すかくる女房人のさうし
まはかやまうひおいつけをやし
をききくききの所にゆまの侍るの

妻恋ひ所のおりわ
作者部類云 源善
寛平五年左少将
延喜元年左遷
いつとて我身きえん
八雲抄に云うを
銘のさうし善胡臣は
まる左遷乃身されん
若の我なつる事を
よめるなとし
あさこふえて郷路の
名ういきさけ心るを
郷の名路をとよめ
ことゆやはかすとは
詠へてしまあれハ

此女乃とくのわ此おいけへとくこせて
おされあるまうきとひろく侍る
返すまう 源よ此朝臣（善） 従四位下 左近中将
いつともくろねきつんむつう
わまハむつし乃我をつくすり
とよわるはききく人乃わかのか
名う侍く京よ久古てまかわ
のうさかくる時よあするよ
ほいつくる よみ人古つまと
あさこふえて郷路乃さしぬれハ

男乃うさを志れいかるよ
正義云ちょこいハ半さ
小忍ひ久ハ昇進(サウジン)
とせず流(レツ)行もなそ
ねハ落しなひ移り
しまなるも也へとえ
へとは見し
雲雀乃八ち志てね我さへ
此哉ねて帰るとて
今別れむりやなふ
大わひと居まうて
雲雀をも志てね我
さへ居と説来也
よきかしらひとき
此句ハ二人のかかさ(ヲサナケ)

といひつれ

男乃うさを志れハかくもふかかぬへみし
おもへハむねのこれのみすゝ

よみ人志らず

雲雀をも志てね我さへとゝろとゝろて
ふハかとゝうなきくかねる
まてきかてさひこきゝころめんとや
わかむつ思ひきのねをこうねん

いせ

みてしハせねかつきゝ心をかわても

ひとよかちねておもひふるものゝく
伊勢乃宰子院ヵまつりくさすい（伊勢の乃二字ろし）
ろりまゐ御とときのおかりまゐるせうわ

第九八

いせ乃うみすなこつくすともはまれと
かくこころわハろうさわしゝを

よみつくわれせそき
歌よみかけまて詠ま
歌の子ふ人さ腹立て
これまゐの謹るや
えてしもせぬかつきゝ心
早くかくかつきゝの
ゆすへて今ハさい
ちまれわさまるも
ぬるとしこち字の実も
元来もえてさわ也
御ときの句り　御時服乃句ゝや正義云御ときゝ句りなとせさ
八御衣乃古きをのゝ式本二御とき乃句り、こをる誤也と但四本
をさらく見合するにあれときゝ句りとある本有仍而附のへ
とゝひ申すと　伊勢乃父能登伊勢守まて任まゝれと
伊勢もそいのまりゝ　のまやえるめをろてよ御服へとろてよめり

乃なり
　つゆき
そうやまま世のうきめ見ゆるまに
世乃中をいとひなくに
うき世を厭離（エンリ）して尼となりてすむ本
も杜鵑月にあかすも
海士乃住家乃
浪ならぬ袖のぬるるもうらめしや
うちぬれて　禁中

山河乃
今ハ世をのがれて
身をもの
人乃
とよみ
世乃中ハ
もみぢ
おもひ
また
秋乃
いせ

世の人のうき事つらき神
に祈の上を祈のうひ
うき事ふ聞きさる
うくまる露をひと
露よ身をむすぶ
うき事ふ聞きさる
とく露をひと
さりやわわのひよ
もきえんとやする
ちうのそうすの
くねの早ね中
祈うと思ふ物の
とうやうとく
風みけいくねね
風は祈うとる

嘆乃ほみうきつづ
うれい祈中も祈果ま
しきうと

名よくちくみ乃
伏んをとすう
明うく来よる
を出けるとく
我いやうふ
風の吹もねやう
うひよひくる
ちきと

あひき乃山寺とと
八年祈ことよう書也
うくわうくてい如祈心
山たひきくいるも

名ふうちくみ乃里とみすえ
名をふをとうきけそちち
ひとくみ人をわするあまうみの
我ともなりめや
うくみうせ乃やむをきもあく
山田法師

あひき乃山寺とと
わうこととすす祈うめや
神そ月乃はいちころ花
みうと吉とをんはけ